東京新聞
中日新聞東京本社
東京都千代田区内幸町二丁目1番4号
〒100-8505 電話 03(6910)2211

「エミおばあちゃんのほほえみに ①－全4回
～畑がつなぐ地域と命のきずな」

東京都社会福祉協議会会長賞 ―― 東京都町田市 小池 常雄さん(58)

つながり きずなづくり大賞2014から

1. 私が生きているあいだだけ

「私が生きているあいだだけでもいいかい?」

…と、エミおばあちゃん（仮名）が微笑みながらいう。

この言葉が、私の週末を、農業生活に変えてしまった。

これは、地域の世話役N氏の紹介でおばあちゃんの家で面接（?）を受けたときのことば。

おばあちゃんはもう80代半ば。

耳は遠く、腰は曲がって随分小さくなった。けれど元気に、自宅の裏畑を毎日のように耕している。近くに住む私は、この畑の一部を無償でお借りする…という虫のよい話でお邪魔している。

ここは、都心から電車で50～60分程の住宅地。40～50年ほど前は、多摩丘陵の里山に囲まれた畑が広がっていた。電鉄会社が大規模な宅地開発を行い、普通の農家だったエミおばあちゃんの家と畑は、開発地区のまん中に取り込まれた。それから50年。子供を育てながら丁寧に自分の畑を耕してきたが、もう広い面積を耕すことができなくなったという。

絵・佐藤圭美

同席して下さった息子さんが言う。

「都市農家が抱える悩みなのですよ…」と。

つまり、「所有地に生産緑地の指定を受け、耕作していればいいが、やめれば宅地並み課税がかかり、大きな税金が生じる。おばあちゃんが元気な時は良かったが、もう広くは耕せない。お嫁さんが畑を手伝ってきたが、それも大変な事。万が一の時は相続税が発生し、手放さなくてはならないが、それまで農地として維持しなければならない。母には元気で少しでも長生きしてほしいが…」と、つらそうに説明してくださった。

ご子息は農業を継がず、広い所有地を活かしたテニスコート経営に忙しい。こんな状況の中、N氏が私を紹介して下さったのだ。

おばあちゃんが若かったころ、このあたりがどんなであったかのお話を聞かせてくださるところを見ると、どうやら私は面接には通ったようだ。

そもそも私、平日には都心に1時間かけて通勤する普通のサラリーマン。職種は建築設計。農業は何の経験もない。自宅の鉢植えでゴーヤやキュウリなど夏野菜を育てている程度。結婚し、この地区に引越した新住民。新住民と言っても30年近い時間が過ぎているが、この土地で生まれ育ったわけではない。そんな私が、急に面積約300坪の広大な畑を、ぽんとただでお借りし、休日農業を営むこととなった。

「エミおばあちゃんのほほえみに ②－全4回
～畑がつなぐ地域と命のきずな」

東京都社会福祉協議会会長賞 ―― 東京都町田市 小池 常雄さん(58)

つながり きずなづくり大賞2014から

2. 「つくし野ビオトーププロジェクト」って?

休日農業といっても、私は、この畑で農業をし、野菜を売って稼ごうというわけではない。地域の子供たちの環境学習のため、低農薬の畑型ビオトープを作ろうと目論んでいる。

私が代表を務める活動はすでに足かけ9年の歴史がある。ここが学区のつくし野小学校T校長（当時）が地域と保護者に声を掛け、「町田市立つくし野小学校ビオトーププロジェクト」という名前で、活動の歴史は始まった。

この活動には、10年前、S市で起きた小学女児による殺人事件に心を痛めたT校長の想いがある。今、子供たちは、テレビやゲームや勉強で忙しく、身の回りの環境、生命や作物に触れる経験が極端に減っている。これが、時に子供たちの問題行動を引き起こしている原因ではないか?

T先生は言う、「私は幼少期、新潟県柏崎市の近郊で育った。少年期数々の自然体験を得て、大人になった。長じた後に思うのは、この経験が今の自分を形作った」…と。

こんなT先生の想いを基に、当初から「命」をテーマとし、「身近な命の大切さや愛おしさを学び、ひいては自分自身や他者の命の大切さを学ぶ」…という目標で、多様な活動を継続してきた。年間活動回数は12回～15回。8年半で開催回数は延100回を数え、参加人数は延6000名を超えた。

絵・佐藤圭美

当初は校庭内各所を学校ビオトープとして整備することを目指した。カブトムシを育てるカブトムシ御殿、トンボ池、メダカ池、キノコ園…巣箱設置も行った。これらの活動を次第に環境学習・教育としてとらえ、再整理。1年間の活動を通じて、ローマ時代の四大元素説になぞらえて「水・土・火・空気」にもう一つ「命」を加えた五つのテーマに沿って活動を設定。1年間で人としての基本的な自然体験ができるよう体系化した。トンボやカブトムシ、メダカの飼育方法も指導し、直接身近な生命と触れ合うこともしている。

今小学校は、授業時間が限られ、教員は雑務に追われ、課外活動に時間を割く余裕はない。子供たちは放課後、外で遊ばなくなった。家庭は、核家族化が進み、祖父母との同居は少ない。子どもたちが育つ中で、身の回りの自然や命と触れ合う機会は大きく減少している。しかしこの地区を改めて考えると、近くに開発を逃れた里山が残り、工夫すれば自然環境に接することができる環境にある。しかし、家族単位では、踏み出せない。